

都道府県別賞一等

私にとっての生命保険

島根県 島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程 三学年

栗岡 佑万子

これまで「生命保険」と聞いても自分には全く関係のないことだと思っていた。両親が保険に入ってくれたとき、それがいつどんなときにどんなふうに関立つかという説明もしてくれたが、それを聞いても、その当時皆勤で学校に行っていた私には、そんなことが自分の身に起きるとは到底思えなかった。

「そんな起きそうもないことのためにお金を使うの。」

とつい聞いてしまった。母は笑いながら

「お守りみたいなものだからね。使わなかったら使わないでいいのよ。おばあちゃんはいつも厄除けだと思って入っておくって言うていたよ。」

と答えてくれて、『ふーん、そんなものか。大人はいろんなことを考えるものだ。』と思っていた。

その起きそうにないと思っていたことが、突然、私に襲いかかった。私は今年の三月、大きな手術を受けることになったのだ。私の手術はとても高額な費用のかかる手術だったが、幸い公的保障が適用されて、手術代の負担はなく手術できることがわかった。しかし、コロナ禍での入院には多くの制約があった。最も両親を悩ませたのが、付き添い者は交代ができず、さらに、一度病院を出ると、二度と病棟へ戻ることはできない。次に会えるのは退院の日になるという制約だった。

そして、いろいろなことがはつきりしないまま、私の入院準備が始まった。母は、もしかしたら長く付き添えないかもしれないので、私が不自由しないよう準備しようと必死だった。一方で、私は、新しいものが揃えられるたび、たくさんお金がかかっていそうだなと思って、悪いことをしているような気持ちになっていた。

手術直前になったある日、帰宅すると母が

「手術後もしばらく付き添えそうだよ。」

と明るい声で教えてくれた。実は、手術の日が近づくにつれて、一人で大丈夫かなと不安になっていたのだけれしくて、自分でもびっくりするほどの大きな声で

「ほんとにっ？よかった。」

と言っていた。言ったあとで今度は、母は仕事を長く休むことになるので、母のパート収入に影響するのではないかと思って心苦しくなった。手術を受ける

までにも、両親とも仕事をたくさん休んで通院に付き添ってくれたことも知っていた。そんな私の不安を見通したかのように母は、生命保険からお金がでることがわかったから、母が仕事を休むことも入院準備を念入りしてたくさんお金を使ったことも全部気にしなくていいと教えてくれた。私はそれを聞いて、本当に心の底からホッとした。

今回の経験で、私は、生命保険は私達が一番困っているときに助けてくれる頼もしい命綱みたいなものだと思うようになった。でも、そんなにすごいものなのに、なぜ祖母は生命保険を「厄除け」と言っていたのだろう？

「命綱」と「厄除け」ではずいぶん違う。考えているうちにふと、あのときの光景が浮かんだ。ああそうだった。あの話を聞いたとき、私だって自分がこんなことになるとは全く思っていなかった。なにもない平和なときに万が一を考えることはとても難しいと今ならわかる。だからこそ祖母は保険を「厄除け」と思うことで、万が一に備えるための保険に加入するきっかけにしていたのだと思う。確かに生命保険は、その人の置かれている状況やこれまでの経験によって、「お守り」になったり、「厄除け」になったり、「命綱」になるのかもしれない。私にとって生命保険は「命綱」だ。命綱があれば安心して、冒険の旅へ出かけることができる。

私は大人になったら、必ず生命保険に加入する。そして、自分にこう号令をかける。

「よし、命綱は装置できた。ここからきつと素晴らしい冒険の旅が始まる。さあ、行こう。」と。